

## 『楚辞章句』「招隠士」注の押韻

田島 花野

### 1 はじめに

後漢の王逸『楚辞章句』(以下『章句』と略称する)の成立については、小南一郎氏が注釈の形式から詳細に論じており、四字句で韻を踏む「I形式」の注釈は楚辞の本文と一体不可分な関係にあり、「恐らくは、(中略)本文と一続きにして朗誦されたのであろう」と推測し<sup>1</sup>、本文一句に対し四字句一句の「Ib形式」の注を伴う作品として「遠遊」・「卜居」・「漁父」・「招隠士」の四篇を挙げている<sup>2</sup>。筆者は四篇の詳細な分析を企図し、「卜居」本文と注の押韻については前々稿<sup>3</sup>で、「漁父」本文と注の押韻および「卜居」注の前漢音については前稿<sup>4</sup>で論じた。

「卜居」・「漁父」に関しては、本文に緊密で複雑な押韻形式が見える点、注に平声と去声を跨いで押韻すると考えられる部分が存在する点、本文は問答形式であり、叙述の部分に「曰」が複数見えるが、「曰」に付注されるのは一箇所のみである点、本文が複雑な押韻形式を持つ部分では、本文と注を組み合わせて朗誦した場合に、本文の押韻の印象が薄くなりかねない点、本文の叙事と登場人物の言葉との境目と注の換韻箇所、一致する箇所と一致しない箇所の両方がある点、本文の換韻と注の換韻に、一致する箇所と一致しない箇所の両方がある点を指摘した。以上の特徴は、四篇のうち他作品でも見られるのだろうか。本稿では「招隠士」本文と注の押韻を検討する。

『楚辞』本文および注は、黄靈庚『楚辞章句疏證 増訂本』(黄著と略称)を底本とし<sup>5</sup>、一部通行の字体に改めた。本文と注の押韻は、羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』(羅著

<sup>1</sup> 小南一郎『楚辞とその注釈者たち』(朋友書店、2003年)「第四章 王逸『楚辞章句』と楚辞文芸の伝承」(「王逸『楚辞章句』をめぐる—漢代章句の学の一側面」『東方学報 京都』63、1995年を改訂)307頁。小南氏は「I形式」のうち、本文一句に対し四字句二句の注が付されるものを「Ia形式」とし、基本的に韻を踏まず、厳格には四字句の形態も取らない注は「II形式」とする(306頁、310頁、320頁)。

<sup>2</sup> 注1小南著316頁。

<sup>3</sup> 田島花野『『楚辞章句』「卜居」注の押韻』(『東北大学中国語学文学論集』23号、2018年)

<sup>4</sup> 田島花野『『楚辞章句』「漁父」注の押韻(付)「卜居」注の前漢音』(『東北大学中国語学文学論集』24号、2019年)

<sup>5</sup> 黄靈庚『楚辞章句疏證』(中華書局、2007年。増訂版は上海古籍出版社、2018年)。

と略称)の「兩漢詩文韻譜」漢代音二十七韻部<sup>6</sup>を用い、『大宋重修広韻』<sup>7</sup>(『広韻』と略称)、唐作藩『上古音手冊(増訂本)』<sup>8</sup>(唐著と略称)、郭錫良『漢字古音手冊 増訂本』<sup>9</sup>(郭著と略称)を参照する。

## 2 「招隱士」の押韻状況

以下、「招隱士」本文と注を第一段から第三段に分ける。第一段・第三段は本文一句に対し二句一聯の注が二箇所が付されており、注を二句一聯ごとに検討する都合上、本文一句を二つに分けて句番号を振る。例えば01~04本文は「桂樹叢生兮山之幽、偃蹇連蜷兮枝相繚。」二句であるが、付注の箇所ごとに切り「桂樹叢生兮 山之幽、偃蹇連蜷兮 枝相繚。」四句と見なす。第二段は原則として本文一句に対し注一句が付されるが、例外的に本文一句に対し一句の注が二箇所が付された部分も混在している。本文一句に注が二箇所付された部分は、例えば23~24本文「心淹留兮恫慌忽。」一句を付注の箇所で切り「心淹留兮 恫慌忽。」二句と見なす。

「招隱士」注は、四字句を基調とした二句一聯の韻文形式を主とし、第一段の第01句~第02句、第04句、第10句、第20句、第二段の第41句の五箇所に非定型句が混在する。結論を先に言えば、非定型句は一見したところ散文形式であるが実際は押韻する。非定型句を含む部分については、先に概略を記し詳細は後述する。

**ゴシック体**が考察対象の字である。「/」は複数の声調や韻部に属する場合に、「?」は『広韻』・羅著に記載を確認できず韻部を確定できない場合に付す。「\*」は前漢と後漢で部が異なる場合に付し、例えば「陽部\*耕部」は前漢では陽部に、後漢では耕部に属することを示す。

「A」等は本文同士の押韻、「a」等は注同士の押韻を示す。例えば「A」と「a」は、別個の記号であり関係はない。段落ごとに記号を振る。「?」は押韻の可能性のある箇所、「○」は本文同士および注同士で無韻の字、「▲」は本文同士の押韻および注同士の換韻、下線部は注において声調を跨いで押韻する可能性のある部分である。

参考までに『広韻』二百六韻目も示す。『広韻』韻目のうち、上声と去声は対応する平声の韻目を用い、( )内に上声と去声の韻目を補う。例えば、「上平声五支」は「平声支韻」、「上声四紙」は「上声(紙韻)支韻」、「去声五寘」は「去声(寘韻)支韻」と表記する。去声韻で対応する平声韻がない場合は「去声泰韻」のように表記する。

<sup>6</sup> 羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』(第1分冊、科学出版社、1958年。中華書局、2007年)。

<sup>7</sup> 『大宋重修広韻』(中文出版社、1982年)

<sup>8</sup> 唐作藩編著『上古音手冊(増訂本)』(江蘇人民出版社、1982年。中華書局、2011年増訂、2020年)

<sup>9</sup> 郭錫良編著『漢字古音手冊 増訂本』(北京大学出版社、1986年。商務印書館、2010年増訂、2014年)

第一段

- 01 桂樹叢生兮（平声庚韻，耕部：○）  
注桂樹芬香、（a）  
以興屈原之忠良也。（a）
- 02 山之幽、（平声幽韻，幽部：A<sup>10</sup>）  
注遠去朝廷（a）  
而隱藏也。（a）▲
- 03 偃蹇連蜷兮（平声仙韻，元部：○）  
注容貌美好、（上声皓韻）豪韻，幽部/去声（號韻）豪韻，幽部：○）  
惠<sup>11</sup>茂盛也。（平声清韻，耕部：b）
- 04 枝相繚。（平声蕭韻，宵部：A）▲  
注信義枝結<sup>12</sup>、（入声屑韻，質部：○）  
條理成也。（平声清韻，耕部：b）▲  
以言才德高明（c）、宜輔賢君（c）、爲貞幹也（c）。▲
- 05 山氣巖嵒兮（平声東韻，東部<sup>13</sup>：○）  
注岑崟嵒嵒、（平声支韻，歌部\*支部<sup>14</sup>：○）  
雲滃鬱也。（入声物韻，質部：d<sup>15</sup>）
- 06 石嵯峨、（平声歌韻，歌部：B<sup>16</sup>）  
注嵯峨巖巖<sup>17</sup>、（入声曷韻，月部?/入声屑韻，月部<sup>18</sup>：○）  
峻蔽日也。（入声質韻，質部：d）
- 07 谿谷嶮巖兮（平声銜韻，談部：○）  
注崎嶇間寫、（上声紙韻）支韻，歌部\*支部<sup>19</sup>：○）  
嶮阻儼<sup>20</sup>也。（入声沒韻?，質部?/入声黠韻?，質部?: d）
- 08 水曾波。（平声戈韻，歌部：B）▲  
注踊躍豐沛、（去声泰韻，祭部：○）  
流迅疾也。（入声質韻，質部：d）
- 09 猿狖羣嘯兮（去声嘯韻，幽部：○）  
注禽獸所居、（平声魚韻，魚部/去声（御韻）魚韻，魚部<sup>21</sup>：○）

<sup>10</sup> 幽宵合韻、羅著 136 頁。

<sup>11</sup> 「惠」は「德」の古字。

<sup>12</sup> 黄著、第四冊（以下、第四冊の場合は冊数を記さない）2143～2144 頁「仁義交錯、條理成也。◎文選本「仁義交錯」作「信義枝結」，（中略）案：信義枝結，言信義結於枝也。後人未審，遂妄改爲「仁義交錯」。」「信義枝結」を「仁義交錯」とした場合、「錯」は「去声（暮韻）模韻，魚部/入声鐸韻，鐸部：○」であり、「結」と同様に押韻しない。

<sup>13</sup> 平声のほか「上声董韻，東部?」もある。

<sup>14</sup> 前漢の歌部韻字表（羅著 153 頁）に収録されていないため、歌部（平声）の東方朔「七諫」の「怨世」（154 頁）に依る。

<sup>15</sup> 質月合韻。

<sup>16</sup> 歌部、羅著 154 頁。

<sup>17</sup> 黄著 2145 頁「嵯峨巖巖、峻蔽日也。◎惜陰本、同治本「巖」作「巖」。（中略）案：（中略）巖、巖通。」

<sup>18</sup> 郭著 22 頁「巖」は月部。

<sup>19</sup> 郭著 220 頁「寫」は歌部。

<sup>20</sup> 黄著 2146 頁「崎嶇間寫、嶮阻儼也。◎（中略）又，尤表本、六臣本「嶮阻儼」下有音注：「（中略）儼，苦滑切。」。なお「滑」は唐著 51 頁「汨（滑）」は物部、60 頁「滑」は物部、郭著 18 頁「滑」は物部。両書における上古音の物部は羅著では術部に相当し、漢代音では質部に入る（羅著 11～14 頁）。

<sup>21</sup> 「居」は『広韻』で平声之韻・平声魚韻に収録される。之韻の字は羅著で之部に属するが、之部韻字表（125 頁）に「居」は収録されていない。魚韻の字は羅著で魚部に属し、魚部韻字表（141 頁～143 頁）では前漢・後漢ともに平声魚韻のみならず去声御韻にも収録される。141 頁の注④を参照。

志樂佚也<sup>22</sup>。(入声質韻,質部?<sup>23</sup>: d)

- 10 虎豹嘯、(平声豪韻,幽部:C<sup>24</sup>) 注猛獸爭食、(去声(志韻)之韻、之部?/入声職韻,職部:○)  
欲相嚙也。(入声屑韻,月部?<sup>25</sup>: d) ▲  
以言山谷之中(○)、幽深險阻(e)、非君子之所處(e)、  
猿狖虎豹(○)、非賢者之偶(e)、使屈原急來也(e)。▲
- 11 攀援桂枝兮(平声支韻,支部:○) 注登山引木、(入声屋韻,屋部:○)  
遠望愁也。(平声尤韻,幽部: f<sup>26</sup>)
- 12 聊淹留。(平声尤韻,幽部:C) ▲ 注周旋中野、(上声(馬韻)麻韻,魚部\*歌部<sup>27</sup>:○)  
立踟躕也。(平声虞韻,魚部: f)
- 13 王孫遊兮(平声尤韻,幽部:○) 注隱士避世、(去声祭韻,祭部:○)  
在山隅也。(平声虞韻,魚部: f) ▲
- 14 不歸、(平声微韻,脂部:D<sup>28</sup>) 注違借舊土、(上声(姥韻)模韻,魚部:○)  
棄室家也。(平声麻韻,魚部?\*歌部: g<sup>29</sup>)
- 15 春草生兮(平声庚韻,耕部:○) 注萬物蠢動、(上声(董韻)東韻,東部:○)  
抽萌芽也。(平声麻韻,魚部\*歌部: g)
- 16 萋萋。(平声齊韻,脂部:D) ▲ 注垂條吐葉、(入声葉韻,盍部?:○)  
紛榮華也<sup>30</sup>。(平声麻韻,魚部\*歌部: g) ▲

<sup>22</sup> 黄著 2147 頁「禽獸所居、志樂佚也。◎文選本、正徳本、隆慶本(中略)「至」作「志」。案:據義,舊作「志樂佚」。至,志之音訛。」

<sup>23</sup> 唐著 188 頁「佚」は質部。郭著 104 頁「佚」は質部。

<sup>24</sup> 幽部、羅著 133 頁。

<sup>25</sup> 入声屑部の字は羅著では質部または月部に属する。唐著 107~108 頁「嚙(嚙)」は月部。

<sup>26</sup> 魚幽合韻。前漢に幽部と魚部の合韻は 11 例あり、幽魚合韻 6 例(平声 3 例、上声 3 例:羅著 136 頁)、魚幽合韻 5 例(平声 2 例、上声 1 例、去声 2 例:150 頁)。後漢に 27 例あり、幽魚合韻 15 例(平声 9 例、上声 4 例、去声 2 例:137 頁)、魚幽合韻 12 例(平声 7 例、上声 4 例、去声 1 例:151 頁)。

<sup>27</sup> 「上声(語韻)魚韻,魚部?」もある。

<sup>28</sup> 脂部、羅著 163 頁。

<sup>29</sup> g は前漢では魚部の押韻、後漢では歌部の押韻となる。前漢では魚部に属し後漢では歌部に属する麻韻の字は羅著 22~23 頁を参照。陳鴻図「《楚辞章句》韻文注的時代」(『中国楚辞学』16、2011 年) 290 頁は g を「魚独」(魚部同士の押韻)とし、「若依兩漢論,魚部麻韻字“家、華”同用只出現于西漢,此部分極有可能西漢的東西。」とする(陳論文 293 頁にも同様の言及がある)。

前漢では魚部に属し後漢では歌部に属する平声麻韻の字のみで構成される押韻は、前漢の魚部に孔臧「諫格虎賦」「牙、家、口(判読不能な字)、華」(羅著 143 頁)、楊雄「將作大匠箴」「奢、家」(144 頁)の 2 例、後漢の歌部に馮衍「顯志賦」「奢、華」(155 頁)、無名氏「相逢行」「車、家」、無名氏「長安有狹斜行」「斜、車、家」(156 頁)の 3 例。「車」は後漢では魚部魚韻と歌部麻韻に両属する(23~24 頁、142 頁、154 頁)ため、除外すれば後漢は「顯志賦」1 例となる。前漢では魚部に属し後漢では歌部に属する平声麻韻の字のみで構成される押韻は後漢に少なくとも 1 例、「車」字を含む押韻を入れれば 3 例あるため、g の成立を前漢に絞ることはできないと考えられる。

参考までに平声以外に前漢では魚部に属し後漢では歌部に属する平声麻韻の字のみから構成される押韻は、前漢に(上声)の賈誼「鵬鳥賦」、同「惜誓」、司馬相如「題市門」(羅著 144 頁)、楊雄「益州箴」、闕名「郊祀歌」の「天馬」(145 頁)の 5 例、後漢に(上声)の無名氏「相和曲鳥生」(156 頁)1 例が見える。

<sup>30</sup> 黄著 2151 頁「垂條吐葉、紛華榮也。◎正徳本、隆慶本(中略)「華榮」作「榮華」、文選本作「榮華」。案:華,古華字。作「華榮」、榮字出韻。」

- 17 歲暮兮（去声暮韻,魚部:○） 注年齒已老、（上声(皓韻)豪韻,幽部:○）  
 壽命衰也。（平声脂韻,脂部<sup>31</sup>: h）
- 18 不自聊、（平声蕭韻,幽部: E<sup>32</sup>） 注中心煩亂、（去声(換韻)桓韻,元部:○）  
 常含哀也<sup>33</sup>。（平声哈韻,脂部: h）▲
- 19 蟋蟀鳴兮（平声庚韻,耕部:○） 注蝓蟬得夏、（上声(馬韻)麻韻,魚部\*歌部?<sup>34</sup>:○）  
 喜呼號也。（平声豪韻,宵部: i）
- 20 啾啾。（平声尤韻,幽部?<sup>35</sup>: E）▲ 注秋節將至、（去声(至韻)脂韻,脂部:○）  
 悲嘹嘯也。（平声宵韻,宵部?<sup>36</sup>: i）▲  
 以言物盛則衰（j）、樂極則衰（j）、  
 不宜久隱（○）、失盛時也（j）。▲

まず、第 05 句～第 10 句に付された定型注の質月合韻「d」を確認する。質部と月部の合韻は前漢に 9 例あり<sup>37</sup>、韻部に関しては質月合韻が成立しうるが、9 例中に屑韻月部を含む押韻は 0 例であるため、前漢に屑韻月部の 10「嘯」を含む質月合韻は成立し難い。後漢に質部と月部の合韻は 13 例あり<sup>38</sup>、うち 1 例に屑韻月部が含まれる<sup>39</sup>ため、後漢では屑韻月部「嘯」を含む質月合韻が成立する。以上より、05～10 定型注の質月合韻「d」は後漢に作られた可能性が高いと考えられる。

次に注における非定型句の押韻を検討する。第一段には第 01 句～第 02 句、第 04 句、第 10 句、第 20 句の四箇所に非定型句が混在し、第 01 句～第 02 句注は以下の通りである。01 下句の押韻字「良」の校勘に関しては後述する。

- 01 桂樹芬香、（平声陽韻,陽部: a）  
 以興屈原之忠良也<sup>40</sup>。（平声陽韻,陽部: a）
- 02 遠去朝廷（平声青韻,耕部<sup>41</sup>: a）  
 而隱藏也。（平声唐韻,陽部: a）▲

<sup>31</sup> 平声脂韻のほか「平声支韻,歌部?支部?\*支部?」もある。

<sup>32</sup> 幽部、羅著 133 頁。

<sup>33</sup> 黄著 2152 頁「中心煩亂、常含憂也。◎（中略）案：（中略）含憂，憂字出韻。舊本作「含哀」。九歎憂菑「内惻隱而含哀」是也。」

<sup>34</sup> 上声のほか「去声(禡韻),魚部?\*歌部?」もある。

<sup>35</sup> 「啾」を羅著 133 頁は「秋」（平声尤韻,幽部）に作る。唐著 76 頁「啾」は幽部、郭著 287 頁「啾」は幽部。

<sup>36</sup> 唐著 70 頁・71 頁・209 頁「嘯」は宵部、郭著 259 頁・261 頁「嘯」は宵部。

<sup>37</sup> 前漢に質月合韻 8 例（羅著 235 頁）、月質合韻 1 例（238 頁）。

<sup>38</sup> 後漢に質月合韻 5 例（羅著 236 頁）、月質合韻 8 例（238 頁）。

<sup>39</sup> 後漢の質月合韻（平声）の傳毅「舞賦」（羅著 236 頁）は質韻質部と屑韻月部を含む。

<sup>40</sup> 黄著 2142 頁「桂樹芬香，以興屈原之忠貞也。◎文選唐寫本（中略）「貞」作「良」。◎（中略）案：作「忠貞」，出韻，舊作「忠良」。」、2142～2143 頁「遠去朝廷而隱藏也。◎（中略）章句以上良、藏協陽韻」。黄著（第一冊）凡例 3 頁によれば「曾運乾周秦古韻三十部説」を用いている。

<sup>41</sup> 平声のほか「去声(徑韻)青韻,耕部」もある。

二句一聯であり、注 01 上句・02 上下句は四字であって、第一段の大多数を占める定型注と同様である。しかし、01 下句は八字と長く、句頭は「以…」形式を取る。「以…」は非定型注の 04 「以言才德高明」、10 「以言山谷之中」、20 「以言物盛則衰」と共通しており、01～02 では 01 下句は非定型句と言ってよいだろう。毎句で押韻し、偶数句末の虚字「也」は押韻字に含まれない。毎句押韻は 03 以降の定型注に全く現れない。01～02 は 01 下句に非定型句が含まれる点、毎句押韻する点から非定型注に分類するのが適切だろう。

句末の虚字に関しては、羅著 124 頁「八、交錯前後互叶例」に班固「奕旨」の「四象既陳 (○)、行之在人 (○)、蓋王政 (\*) 也；成敗臧否 (●)、為人由己 (●)、危之正 (\*) 也。」、劉向「九歎」の「遠遊」 「譬彼蛟龍 (●)、乘雲浮 (△) 兮、汎淫瀕溶 (●)、紛若霧 (△) 兮、潺湲鞦韆 (○)、雷動電發 (○)、馭高舉 (△) 兮、升虛凌冥 (、)、沛濁浮清 (、)、入帝宮 (\*) 兮、搖翹奮羽 (◎)、馳風騁雨 (◎)、游無窮 (\*) 兮。」が挙げられ、句末の虚字「也」や「兮」を押韻字に含めていない。しかし、「奕旨」では「蓋王政 (\*) 也」と「危之正 (\*) 也」が押韻し、「九歎」では「乘雲浮 (△) 兮」・「紛若霧 (△) 兮」・「馭高舉 (△) 兮」三句が押韻し、「入帝宮 (\*) 兮」と「游無窮 (\*) 兮」が押韻しており、句末の虚字がある句同士の押韻である。

他方で張雙棣『淮南子用韻考』「4. 不很整齊的句子用韻」<sup>42</sup>に倣真訓「夫人之拘於世 (月部) 也，必形系而神泄 (月部)，故不免於虛。使我可係羈 (歌部) 者，必其有命在於外 (月部) 也。」の月歌通韻が挙げられている。「夫人之拘於世也」「必其有命在於外也」のように句末に虚字があつて虚字を押韻字に含めない句と、「必形系而神泄」のように句末に虚字がない句を押韻と見なしている。『淮南子用韻考』の例から注 01～02 においても、句末に虚字がない句「桂樹芬香」「遠去朝廷」と、句末に虚字があつて虚字を押韻字に含めない句「以興屈原之忠良也」「而隱藏也」を押韻と見なして差し支えないであろう。陽部「香」「良」「藏」と耕部「廷」が押韻しうる。

『広韻』の二百六韻目を補うと「香」「良」は陽韻陽部、「藏」は唐韻陽部、「廷」は青韻耕部である。前漢に陽部と耕部の合韻は 13 例あり<sup>43</sup>、うち 1 例が陽韻陽部・唐韻陽部・青韻耕部の三韻目を含む<sup>44</sup>。後漢に陽部と耕部の合韻は 46 例あり<sup>45</sup>、うち 3 例が陽韻陽部・唐韻陽部・青韻耕部の三韻目を含む<sup>46</sup>。従って、前漢・後漢ともに陽韻陽部「香」「良」、青韻耕部「廷」、唐

<sup>42</sup> 張雙棣『淮南子用韻考』(商務印書館、2010 年) 3～4 頁。155 頁にも掲載。

<sup>43</sup> 前漢に陽耕合韻 5 例(平声: 羅著 188 頁)、耕陽合韻 8 例(平声 5 例、去声 3 例: 196 頁)。

<sup>44</sup> 陽耕合韻(平声)の楊雄「趙充國頌」(二例目)(羅著 188 頁)。なお、同頁「趙充國頌」(一例目)は陽韻陽部・青韻耕部の二韻目を含む。

<sup>45</sup> 後漢に陽耕合韻 38 例(平声: 羅著 188～189 頁)、耕陽合韻 8 例(平声 7 例、去声 1 例: 197 頁)。

<sup>46</sup> 耕陽合韻(平声)の傅毅「舞賦」、張昶「華山堂闕碑銘」、闕名「李翊夫人碑」(羅著 197 頁)の 3 例。なお、同頁の張衡「髑髏賦」、馬融「廣成頌」の 2 例は陽韻陽部・青韻耕部を含み、同頁の闕名「史晨奏祀孔子廟碑」1 例は唐韻陽部・青韻耕部を含む。

韻陽部「藏」の陽耕合韻が成立する。

さて、先程は詳しく触れなかったが、注 01 下句「以興屈原之忠良也」は現行本では「以興屈原之忠貞也」に作る。黄著は 01 下句と 02 下句「而隱藏也」のみが押韻すると考え、「貞」は「藏」と押韻しないため、文選唐寫本に従って「貞」は本来「良」に作ったとする<sup>47</sup>。現行本「以興屈原之忠貞也」の場合、押韻状況はどうか。

- 01 桂樹芬香、 (平声陽韻,陽部: a)  
以興屈原之忠貞也。 (平声清韻, 耕部: a)
- 02 遠去朝廷 (平声青韻,耕部: a)  
而隱藏也。 (平声唐韻,陽部: a) ▲

最初に、01 下句「貞」と 02 下句「藏」の二字間での押韻を確認する。「貞」は清韻耕部、「藏」は唐韻陽部である。前漢の陽部と耕部の合韻 13 例中、唐韻陽部と清韻耕部の押韻は 0 例であり、「貞」「藏」の押韻は成立しない。後漢の陽部と耕部の合韻 46 例中、唐韻陽部と清韻耕部の押韻は平声 6 例あり<sup>48</sup>、「貞」「藏」の押韻が成立する。「貞」と「藏」は前漢では押韻せず、後漢では押韻する。

続いて、陽韻陽部「香」、清韻耕部「貞」、青韻耕部「廷」、唐韻陽部「藏」の四字間での押韻を検討する。「香」と「藏」は陽部同士で押韻し、「貞」と「廷」は耕部同士で押韻する。陽部と耕部の間ではどうか。前漢の陽部と耕部の合韻 13 例中、陽韻陽部と清韻耕部の押韻は 0 例、陽韻陽部と青韻耕部の押韻は 1 例、唐韻陽部と清韻耕部の押韻は 0 例、唐韻陽部と青韻耕部の押韻は 1 例である。陽韻陽部・青韻耕部の例と唐韻陽部・青韻耕部の例は同一であり、陽耕合韻(平声)の楊雄「趙充國頌」(二例目)<sup>49</sup>が陽韻陽部・青韻耕部・唐韻陽部の三韻目を含む。従って、陽韻陽部「香」・青韻耕部「廷」・唐韻陽部「藏」の三字間では陽耕合韻が成立し、清韻耕部「貞」と青韻耕部「廷」の二字間でも耕部同士の押韻が成立するが、「貞」と「香」「藏」の間に押韻が成立せず、四字間で「貞」を押韻に含めるのは困難である。「桂樹芬香(a)、以興屈原之忠貞也(○)。遠去朝廷(a)、而隱藏也(a)。」となるのは形式の上で不自然だ。

後漢の陽部と耕部の合韻 46 例中、2 例が陽韻陽部・清韻耕部・青韻耕部・唐韻陽部を含む<sup>50</sup>ため、四字間に押韻が成立する。以上のように「香」「貞」「廷」「藏」の四字間で、前漢には「貞」を除く三字が押韻し、後漢では四字全てが押韻する。前漢では押韻しなかった字が後漢になっ

<sup>47</sup> 注 40 を参照。

<sup>48</sup> 陽耕合韻(平声)の班固「答賓戲」(羅著 188 頁)、崔琦「七蠲」、闕名「成陽靈台碑」(189 頁)、耕陽合韻(平声)の傅毅「舞賦」、闕名「史晨奏祀孔子廟碑」、闕名「李翊夫人碑」(197 頁)の 6 例。

<sup>49</sup> 陽耕合韻(平声)の楊雄「趙充國頌」(二例目)「羌,陽,章,九,京,庭」(羅著 188 頁)。

<sup>50</sup> 耕陽合韻(平声)の傅毅「舞賦」、闕名「李翊夫人碑」(羅著 197 頁)の 2 例。なお、同頁の張昶「華山堂闕碑銘」1 例は陽韻陽部・清韻耕部・青韻耕部を含み、同頁の闕名「史晨奏祀孔子廟碑」1 例は清韻耕部・青韻耕部・唐韻陽部を含む。

て偶々押韻するようになるという現象が起こる可能性は低い。よって、01 下句を「以興屈原之忠貞也」に作る場合、01～02 注は後漢に成立したと考えられる。

注 01～02 は、01 下句を「以興屈原之忠良也」に作る場合と「以興屈原之忠貞也」に作る場合の二通りがある。「以興屈原之忠良也」に作る場合は前漢・後漢ともに「桂樹芬香 (a)、以興屈原之忠良也 (a)。遠去朝廷 (a)、而隱藏也 (a)。」と毎句押韻する。「以興屈原之忠貞也」に作る場合、前漢では「貞」字が押韻せず、後漢では「桂樹芬香 (a)、以興屈原之忠貞也 (a)。遠去朝廷 (a)、而隱藏也 (a)。」と毎句押韻するため、後漢に成立したと考えられる。「良」に作る場合も「貞」に作る場合も毎句押韻し、他の定型注が偶数句末で隔句押韻するのとは異なる。

次に、第 04 句では定型注「信義枝結、條理成也」の後に以下のような非定型注がある。

以言才德高明、 (平声庚韻,陽部\*耕部:c)

宜輔賢君、 (平声文韻,真部:c)

爲貞幹也。 (去声(翰韻)寒韻,元部?<sup>51</sup>:c) ▲

押韻する可能性のある字は、平声の庚韻で前漢は陽部に属し後漢は耕部に属する「明」、平声の文韻真部「君」、去声の寒韻元部「幹」である。最初に真部と元部を検討するが、平声の真部「君」と去声の元部「幹」は声調が異なっている。

羅著では前漢に真部と元部の合韻は 51 例あり<sup>52</sup>、うち 2 例が平声と去声を跨いで押韻する<sup>53</sup>ため、平声「君」と去声「幹」は声調を跨いで押韻しうる。しかし、51 例中に文韻真部と寒韻元部の組み合わせは 0 例であるため、文韻真部「君」と寒韻元部「幹」の押韻は成立しない。

また、平声の庚韻「明」は前漢では陽部に属する。前漢に陽部と真部の合韻は 0 例、陽部と元部の合韻は 0 例、陽部・真部・元部の三部合韻も 0 例である。従って、陽部「明」と真部「君」の押韻、陽部「明」と元部「幹」の押韻はどちらも成立しない。以上より、「明」「君」「幹」は前漢では全く押韻しない。

後漢に真部と元部の合韻は 102 例あり<sup>54</sup>、うち 5 例が平声と去声を跨いで押韻する<sup>55</sup>ため、平声「君」と去声「幹」は声調を跨いで押韻しうる。また 102 例中 5 例に寒韻元部と文韻真部

<sup>51</sup> 唐著 48 頁「幹」「幹」は元部、郭著 294 頁「幹」は元部、295 頁「幹(井欄)」は元部。

<sup>52</sup> 前漢に真元合韻 39 例 (平声 34 例、上声 2 例、去声 3 例: 羅著 203 頁～204 頁)、元真合韻 12 例 (平声 10 例、去声 2 例: 211 頁)。

<sup>53</sup> 真元合韻 (去声) の王褒「聖主得賢臣頌」、楊雄「羽獵賦」(羅著 204 頁)。なお前漢の元真合韻 (平声) の王褒「洞簫賦」(211 頁) は、平声と去声の押韻とも平声と上声の押韻とも解釈できるため、例数に含めない。

<sup>54</sup> 後漢に真元合韻 63 例 (平声 60 例、上声 1 例、去声 2 例: 羅著 204 頁～206 頁)、元真合韻 39 例 (平声 35 例、去声 4 例: 212 頁)。

<sup>55</sup> 元真合韻 (平声) の崔駰「達旨」、王逸「九思哀歳」(羅著 212 頁)、(去声) の班固「西都賦」、張衡「冢賦」、郭正「法真頌」(212 頁) の平声 2 例、去声 3 例、計 5 例。なお真元合韻 (平声) の無名氏「悲歌」(205 頁) は、平声と去声の押韻とも平声と上声の押韻とも解釈できるため、例数に含めない。



の押韻が見える<sup>56</sup>ため、文韻真部「君」と寒韻元部「幹」の真元合韻が成立する。

平声の庚韻「明」は後漢では耕部に移る。後漢に耕部と真部の合韻は12例あり、うち1例に庚韻耕部（前漢は陽部）と文韻真部の押韻がある<sup>57</sup>ことから、庚韻耕部「明」と文韻真部「君」の耕真合韻が成立する。また、後漢に耕部と元部の合韻は0例であり、耕部「明」と元部「幹」の押韻は成立しない。

最後に、「明」「君」「幹」の耕真元合韻は成立するのだろうか。後漢では耕部・真部・元部の三部合韻は6例ある<sup>58</sup>ため、耕部「明」・真部「君」・元部「幹」は耕真元合韻となりうる。

以上のように、後漢では平声と去声を跨いだ寒韻元部と文韻真部の真元合韻が成立し、庚韻耕部と文韻真部の耕真合韻も成立し、庚韻耕部と寒韻元部の押韻は直接には成立しないものの、耕部・真部・元部の三部合韻の例があることから、平声の庚韻耕部「明」・平声の文韻真部「君」・去声の寒韻元部「幹」の声調を跨いだ耕真元合韻が成立する。

「明」「君」「幹」は、前漢では全く押韻せず、後漢では耕真元合韻となりうる。前漢に散文として作られた注が、後漢に至って偶然に韻文と読めることは考えにくく、この部分の注は後漢に成立したのであろう。

続いて、第10句では定型注「猛獸爭食、欲相嚙也。」の後に次のような非定型注が付される。

以言山谷之中、(平声東韻,冬部/去声(送韻)東韻,東部?:○)

幽深險阻、(上声(語韻)魚韻,魚部?/去声(御韻)魚韻,魚部?:e)

非君子之所處、(上声(語韻)魚韻,魚部/去声(御韻)魚韻,魚部:e)

獼狻虎豹、(去声(效韻)肴韻,幽部?宵部?:○)

非賢者之偶、(上声(厚韻)侯韻,魚部/去声(侯韻)侯韻,魚部?<sup>59</sup>:e)

使屈原急來也。(平声(哈韻),之部/去声(代韻)哈韻,之部<sup>60</sup>:e) ▲

去声の魚韻魚部「阻」「處」と去声の侯韻魚部「偶」の魚部同士の押韻が中核をなしており、少なくとも「中(○)、阻(b)、處(b)、豹(○)、隅(b)、來(○)」となる。これに去声の

<sup>56</sup> 元真合韻(平声)の杜篤「論都賦」(羅著204頁)、王逸「九思」の「守志」、闕名「陳君閣道碑」、同「劉熊碑」、無名氏「雁門太守行」(205頁)の5例。

<sup>57</sup> 耕真合韻(平声)の闕名「張公神碑」(羅著197頁)。

<sup>58</sup> 耕真元合韻(平声)の李尤「函谷關賦」(羅著198頁)、真元耕合韻(平声)の許慎「說文解字後敘」、堂谿協「開母廟石闕銘」、李尤「德陽殿賦」、蔡邕「王子喬碑」、闕名「北海相景君銘」(206頁)の6例。うち庚韻耕部(前漢は陽部)と文韻真部は0例、寒韻元部と文韻真部の押韻は0例、庚韻耕部(前漢は陽部)と寒韻元部の押韻は0例。声調を跨いだ押韻は「北海相景君銘」1例が平声と上声を含む。

<sup>59</sup> 「偶」は『広韻』で上声(厚韻)侯韻・去声(侯韻)侯韻に収録される。羅著の魚部韻字表(141頁~143頁)では前漢・後漢ともに上声(厚韻)侯韻に収録されており、去声(侯韻)侯韻には収録されていない。前漢の押韻例は存在を確認できなかった。後漢の幽魚合韻(去声)の闕名「高頤碑」(137頁)で去声幽部「青」と押韻し、魚部(平声)の闕名「劉熊碑」(147頁)で平声「樞」と押韻し、魚幽宵之合韻(上声)の張超「誚青衣賦」(152頁)では上声と押韻する。「偶」は「高頤碑」では去声の可能性があり、「劉熊碑」では上声の可能性も去声の可能性もある。

<sup>60</sup> 「來」は『広韻』で平声(哈韻)にのみ収録されるが、羅著で平声(哈韻)・去声(代韻)哈韻に収録される(125頁)。同頁の注④を参照。

哈韻之部「來」が加わる可能性がある。

黄著は諸本を校勘して末句「使屈原急來也」を「後の竄入する所」と結論付ける<sup>61</sup>。他方で、第 41 句の注末尾に「欲使屈原、還歸郢也。」と屈原への言及があり、この第 10 句の注末尾に「屈原」への言及があっても、内容的には不自然ではない。魚韻魚部「阻」「處」、侯韻魚部「偶」と哈韻之部「來」は押韻するだろうか。

之部と魚部の合韻は前漢に 5 例あり<sup>62</sup>、うち 1 例に魚韻魚部と哈韻之部の押韻があり<sup>63</sup>、1 例に侯韻魚部と哈韻之部の押韻が見える<sup>64</sup>。従って魚韻魚部「阻」「處」と哈韻之部「來」の魚之合韻が成立し、侯韻魚部「偶」と哈韻之部「來」の魚之合韻も成立するため、魚韻魚部「阻」「處」、侯韻魚部「偶」、哈韻之部「來」は魚之合韻となる。

後漢に之部と魚部の合韻は 12 例ある<sup>65</sup>。之部と魚部の二韻合韻に魚韻魚部と哈韻之部の押韻例は 0 例、侯韻魚部と哈韻之部の押韻例も 0 例であるが、三韻以上の合韻では 1 例で哈韻之部と魚韻魚部が押韻する<sup>66</sup>。魚韻魚部「阻」「處」と侯韻魚部「偶」が同部で押韻しており、魚韻魚部「阻」「處」と哈韻之部「來」の魚之合韻が成立するため、魚韻魚部「阻」「處」を媒介にして魚韻魚部「阻」「處」、侯韻魚部「偶」、哈韻之部「來」は魚之合韻になると考えられる。

以上より、前漢・後漢ともに哈韻之部「來」を含んだ魚之合韻「中 (○)、阻 (b)、處 (b)、豹 (○)、隅 (b)、來 (b)」が成立すると考えられる。このため、末句「使屈原急來也」は後世の竄入とは限らず、当初から含まれていた可能性がある。

更に、第 20 句の定型注「秋節將至、悲嘹嘯也。」の後には以下のような非定型注がある。

以言物盛則衰、（平声脂韻,脂部 j）

樂極則哀、（平声哈韻,脂部: j）

不宜久隱、（上声(隱韻)欣韻,真部/去声(焮韻)欣韻,真部?:○)

失盛時也。（平声之韻,之部: j）▲

脂韻脂部の「衰」と哈韻脂部の「哀」が脂部同士で押韻<sup>67</sup>し、之韻之部の「時」が加わる。之

<sup>61</sup> 黄著 2148 頁「文選尤表本、明州本、…「之偶」下皆有「也」字、無「使屈原急來也」六字。…案：喻林卷五一人事門失所引「之處」、「之偶」下有「也」字、無「使屈原急來也」六字、則舊本如此。有「使屈原急來也」六字、後所竄入。」

<sup>62</sup> 前漢に之魚合韻 2 例（上声：羅著 130 頁）、魚之合韻 3 例（平声 2 例、上声 1 例、去声 1 例：150 頁）。

<sup>63</sup> 魚之合韻（去声）の司馬相如「子虛賦」（羅著 150 頁）。

<sup>64</sup> 之魚合韻（去声）の劉向「九歎怨思」（羅著 130 頁）。

<sup>65</sup> 後漢に之魚合韻 4 例（平声 1 例、上声 3 例：131 頁）、魚之合韻 8 例（平声 1 例、上声 7 例：152 頁）。

<sup>66</sup> 魚幽宵之合韻（平声）の王逸「九思逢尤」（羅著 152 頁）。

<sup>67</sup> 前漢では之脂合韻（去声）の楊雄「蜀都賦」1 例に脂韻脂部と哈韻脂部の同部押韻がある（羅著 131 頁）。後漢では之部と脂部の二部合韻中に脂韻脂部と哈韻脂部の押韻は見えないが、脂部（平声）の蔡邕「濟北相崔君夫人誄」、關名「無極山碑」、無名氏「古詩」3 例に脂韻脂部と哈韻脂部の押韻がある（165 頁）。

部と脂部の合韻は前漢に 11 例あり<sup>68</sup>、うち 5 例に之韻之部と脂韻脂部の押韻が見える<sup>69</sup>。後漢では脂部と之部の合韻は 11 例あり<sup>70</sup>、うち 3 例に之韻之部と脂韻脂部の押韻がある<sup>71</sup>。以上より、前漢・後漢ともに脂韻脂部「衰」を媒介にして哈韻脂部「哀」・之韻之部「時」との脂之合韻が成立する。

### 第一段まとめ

本文同士の押韻を確認する。01～04「桂樹叢生兮(○)山之幽(A)、偃蹇連蜺兮(○)枝相繚(A)。」、05～08「山氣巖崑兮(○)石嵯峨(B)。谿谷嶄巖兮(○)水曾波(B)。」、09～12「猿狖羣嘯兮(○)虎豹嘯(C)。攀援桂枝兮(○)聊淹留(C)。」、13～16「王孫遊兮(○)不歸(D)、春草生兮(○)萋萋(D)。」、17～20「歲暮兮(○)不自聊(E)、蟋蟀鳴兮(○)啾啾(E)。」である。付注の箇所ごとに切って句中「兮」の直前の字も検討したが、「兮」の直前の字は全く押韻せず、句末の字のみが押韻する。毎句押韻であり、二句一聯ごとに換韻する。

注に関しては、以下の八点が指摘できる。

第一に、本文一句に対し、四字句を基調とした二句一聯の定型注が二箇所に付される。二句一聯の定型注は小南一郎氏による分類の「I a 形式」に類似するが、「I a 形式」は本文一句に対し四字句二句が付されるものであり、「招隱士」第一段の定型注は本文一句に対し四字句四句が付される点で純粋な「I a 形式」とは異なる。

第二に、03 以降の定型注は全体が押韻する。「○ b ○ b」のように隔句押韻し、04、10、13、16、18、20 の六度換韻する。韻の長さは四句二韻から十二句六韻である。

第三に、05～10 の定型注は韻目の面から後漢に成立した可能性が高い。

第四に、非定型注の形式を記す。01～02 は二句一聯の定型注が二箇所に付されている点は定型注と同様であるが、01 下句は八字句である点と全体は毎句押韻「a a a a」である点が非定型である。04、10、20 では定型注の直後に非定型注が入る。非定型注は、04 が三句で毎句押韻「c c c」形式であり、10 は六句で隔句押韻と毎句押韻を組み合わせた「○ e e ○ e e」、20 は四句で隔句押韻と毎句押韻を組み合わせた「j j ○ j」である。非定型注は全て押韻する。

第五に、04、10、20 の非定型注は、定型注の換韻箇所に位置しており、非定型注によって定型注の押韻が阻害されることはない。非定型注は、定型注の押韻を踏まえて配置されている。

<sup>68</sup> 前漢に之脂合韻 3 例（平声 2 例、去声 1 例：羅著 131 頁）、脂之合韻 8 例（平声 4 例、上声 2 例、去声 2 例：167 頁）。

<sup>69</sup> 之脂合韻（平声）の枚乘「柳賦」（羅著 131 頁）、脂之合韻（平声）の楊雄「羽獵賦」、楊雄「逐貧賦」、司馬相如「美人賦」、（去声）の司馬相如「子虛賦」（167 頁）の平声 4 例、去声 1 例、計 5 例。

<sup>70</sup> 後漢に之脂合韻 4 例（平声 3 例、上声 1 例：羅著 132 頁）、脂之合韻 7 例（平声 4 例、去声 3 例：168 頁）。

<sup>71</sup> 之脂合韻（平声）の王逸「機婦賦」、（上声）の李尤「弧矢銘」（羅著 132 頁）、脂之合韻（去声）の李尤「大学銘」（168 頁）、計 3 例。

第六に、非定型注のうち、01～02の01下句を「以興屈原之忠貞也」に作る場合は後漢に成立したと考えられ、04も後漢の成立と考えられる。

第七に、01～02非定型注には01下句「以興屈原之忠良也」もしくは「以興屈原之忠貞也」、10非定型注には六句目「使屈原急來也」と屈原への言及が見える。

第八に、04非定型注は平声と去声を跨いで押韻する。

本文と注の関係については、以下二点を指摘できる。

第一に、本文の換韻と注の換韻には一致する箇所と一致しない箇所とがある。04、16、20では一致する。他方、本文は01～04で押韻するが注は02で換韻し、本文は01～02「○A」と03～04「○A」に両断される。同様に本文09～12は注10の換韻で両断され、本文17～20は注18の換韻で両断される。さらに本文13～16は注13によって13「○」と14～16「D○D」に分断された形となる。

第二に、本文と注を続けて朗読した場合、03～04を例に取れば「(本文) 偃蹇連蜷兮 (注) 容貌美好、惠茂盛也。(本文) 枝相繚。(注) 信義枝結、條理成也。」となり、本文の分量に対して注の分量が多くなる。続けて非定型注「以言才德高明、宜輔賢君、爲貞幹也。」も朗読すれば、注の分量は更に増える。本文と注を続けて朗読すると、本文は分断が強まって印象が薄れ、注の押韻を中心に鑑賞することになるだろう。

## 第二段

21 塊兮軋、 (入声錡韻,質部:A <sup>72</sup> )	注霧氣味也。(去声(隊韻)灰韻,脂部:a <sup>73</sup> )
22 山曲崩、 (入声物韻,質部:A)	注盤詰屈也。(入声物韻,質部:a)
23 心淹留兮 (平声尤韻,幽部:○)	注志望絶也。(入声薛韻,月部:a)
24 恫慌忽。(入声沒韻,質部:A)	注亡妃匹也。(入声質韻,質部?:a)
25 罔兮沕、 (入声物韻,質部:A)	注精氣失也。(入声質韻,質部:a)
26 僚兮栗、 (入声質韻,質部:A)	注心剝切也 <sup>74</sup> 。(入声屑韻,質部:a)
27 虎豹穴、 (入声屑韻,質部:A)	注嶮穿峽也。(入声屑韻?,質部?:a) ▲
28 叢薄深林兮 (平声侵韻,侵部:○)	注攢刺棘也。(入声職韻,職部:b)
29 人上慄。(入声質韻,質部:A) ▲	注恐變色也。(入声職韻,職部:b) ▲

<sup>72</sup> 質部、羅著 234 頁。

<sup>73</sup> 質脂月合韻。

<sup>74</sup> 黄著 2157 頁「心剝切也。◎ (中略) 章句「心剝切」云云,「剝切」當作「切剝」。詳參九辯「忼慨絶兮不得」注。此趁韻例乙。」、2158 頁で「切」を押韻字とする。なお「剝」は「入声覺韻,屋部」であり、前漢・後漢ともに脂部と屋部の合韻 0 例、屋部と質部の合韻 0 例、屋部と月部の合韻 0 例、三部以上の合韻でも屋部と脂部・質部・月部を含む押韻は 0 例であるため、「剝」は押韻しない。

- 30 嶽岑碣磳兮、(上声紙韻,歌部\*支部?:B<sup>75</sup>) [注]山阜岷嶠。(平声虞韻,魚部:c)
- 31 礧礧磳礧、(上声紙韻,歌部\*支部?:B) [注]崔嵬嵯嶮<sup>76</sup>。(上声(彌韻)仙韻,元部?:○)
- 32 樹輪相糾兮 (上声黝韻,幽部:○) [注]交錯扶疏。(平声魚韻,魚部:c)
- 33 林木茂斂。(上声紙韻,歌部\*支部?:B) [注]枝條盤紆。(平声虞韻,魚部:c)
- 34 青莎雜樹兮 (去声遇韻,魚部<sup>77</sup>:○) [注]草木雜居。(平声魚韻,魚部:c)
- 35 蘋草蠹靡、(上声紙韻,歌部\*支部?:B) [注]隨風披敷。(平声虞韻,魚部?<sup>78</sup>:c) ▲
- 36 白鹿麇麇兮 (下平九麻,魚部?\*歌部?:○) [注]衆獸並遊。(平声尤韻,幽部:d<sup>79</sup>)
- 37 或騰或倚。(上声紙韻,歌部\*支部?:B) ▲ [注]走住異趨。(平声虞韻,魚部:d) ▲
- 38 狀兕峩峩兮峨峨、(平声歌韻,歌部:C<sup>80</sup>) [注]頭角甚殊。(平声虞韻,魚部:e)
- 39 淒淒兮澼澼。(平声支韻,歌部\*支部?:C) [注]衣毛若濡也。(平声虞韻,魚部:e)
- 40 獼猴兮熊羆、(平声支韻,歌部?\*支部:C) [注]百獸俱也。(平声虞韻,魚部:e)
- 41 慕類兮以悲。(平声脂韻,脂部:C) ▲ [注]哀己不遇也。(去声(遇韻)虞韻,魚部:e) ▲

從此以上 (f)、皆陳山林傾危 (○)、草木茂盛 (f)、▲  
麋鹿所居 (g)、虎兕所聚 (g)、▲

不宜育道德 (○)、養情性 (h)、欲使屈原 (○)、還歸郢也 (h)。▲

最初に、定型注の中で第 21 句～第 27 句の質脂月合韻「a」を確認する。質部の「屈」「匹」「失」「切」「岷」を中核とし、脂部の「昧」・月部の「絶」が加わった押韻である。前漢に脂部と質部の合韻は 1 例、脂部と月部の合韻は 0 例、質部と月部の合韻は 9 例である<sup>81</sup>。質部・脂部・月部の合韻は 0 例ながら、質月祭脂合韻が 1 例ある<sup>82</sup>。韻部に関しては質月祭脂合韻の例があるため質脂月合韻は成立しうる。しかし韻目の面では、脂部を含む合韻中に去声(隊韻)灰韻脂部が 0 例であるため、前漢では去声(隊韻)灰韻脂部の 21「昧」を押韻に含めることは困難と考えられる。

後漢に脂部と質部の合韻は 10 例あり、脂部と月部の合韻は 1 例、質部と月部の合韻 13 例、質部・脂部・月部の合韻は 2 例ある<sup>83</sup>ため、韻部に関して質脂月合韻が成立する。脂部を含む

<sup>75</sup> 前漢では歌部、羅著 155 頁。

<sup>76</sup> 黄著 2160 頁「崔嵬嵯嶮」。◎ (中略) 案：(中略) 崔嵬、嵯嶮亦聲之轉，高峻貌。(中略) 然此作「嵯嶮」者，出韻。」。なお「崔」は「平声灰韻,脂部:○」、「嵬」は「平声灰韻,脂部:○」、「嵯」は「上声産韻,元部?:○」で前句「岷」と押韻しない。

<sup>77</sup> 去声のほか「上声麇韻,魚部?」もある。

<sup>78</sup> 唐著 45 頁「敷」は魚部、郭著 172 頁「敷」は魚部。

<sup>79</sup> 幽魚合韻。

<sup>80</sup> 前漢では歌脂合韻、羅著 157 頁。

<sup>81</sup> 前漢の脂質合韻 (去声) (羅著 168 頁) 1 例。質部と月部の合韻は注 37 を参照。

<sup>82</sup> 前漢の質月祭脂合韻 (羅著 235 頁) 1 例。

<sup>83</sup> 後漢に脂質合韻 (去声) (羅著 169 頁) 9 例、質脂合韻 (236 頁) 1 例。脂月合韻 (去声) (羅著 169 頁) 1 例。質部と月部の合韻は注 38 を参照。脂月質合韻 (去声) (羅著 169 頁) 1 例、質月脂合韻 (236 頁) 1 例。

合韻中に去声(隊韻)灰韻脂部が3例含まれており<sup>84</sup>、後漢では韻目の面でも去声(隊韻)灰韻脂部の21「味」を押韻に含めることができる。従って、定型注21～27の質脂月合韻「a」は後漢に成立した可能性が高い。

次に、定型注第36句～第37句の押韻「d」を検討する。現行本での押韻字は幽部の「遊」と魚部の「趨」であり、平声同士の幽魚合韻<sup>85</sup>となる。前漢・後漢ともに成立する。

37「走住異趨」について、黄著は校勘および本文との照合により、古くは「走住殊異」に作ったとする<sup>86</sup>。「異」は「去声(志韻)之韻、之部:d」であり、dは平声と去声を跨ぐ幽之合韻となる。之部と幽部の合韻は前漢に11例あり<sup>87</sup>、うち声調を跨ぐ押韻は0例である。後漢に26例あり<sup>88</sup>、うち平声と去声を含む押韻は2例である<sup>89</sup>。平声と去声を跨ぐ幽之合韻は、前漢では成立し難く、後漢では成立する。よって37を「走住殊異」に作る場合は、後漢に成立した可能性が高い。

続いて、第41句には定型注「哀己不遇也」の後に以下のような非定型注が続く。

從此以上、(上声(養韻)陽韻,陽部<sup>90</sup>/去声(漾韻)陽韻,陽部?: f)  
 皆陳山林傾危、(平声支韻,歌部\*支部:○)  
 草木茂盛、(平声清韻,耕部/去声(勁韻)清韻,耕部<sup>91</sup>: f) ▲  
 麋鹿所居、(平声魚韻,魚部/去声(御韻)魚韻,魚部<sup>92</sup>: g)  
 虎兕所聚、(上声(慶韻)虞韻,魚部/去声(遇韻)虞韻,魚部: g) ▲  
 不宜育道德、(入声德韻,職部:○)  
 養情性、(去声(勁韻)清韻,耕部: h)  
 欲使屈原 (平声元韻,元部:○)

<sup>84</sup> 後漢の脂質合韻(去声)2例では馬融「長笛賦」が去声(隊韻)灰韻脂部と屑韻質部を含み、無名氏「古詩爲焦仲卿妻作」が去声(隊韻)灰韻脂部と質韻質部を含み、脂月合韻(去声)1例の班固「幽通賦」は去声(隊韻)灰韻脂部を含むが月部薛韻を含まない(羅著169頁)。

<sup>85</sup> 幽部と魚部の合韻は前漢11例、幽魚合韻6例(平声3例、上声3例: 羅著136頁)、魚幽合韻5例(平声2例、上声1例、去声1例: 150頁)、後漢27例、幽魚合韻15例(平声9例、上声4例、去声2例: 137頁)、魚幽合韻12例(平声7例、上声4例、去声1例: 151頁)。

<sup>86</sup> 黄著2165頁「走住異趨。◎文選本、正德本(中略)「異趨」作「殊異」。(中略)案: 騰者, 走也。倚者, 住也。據此, 舊作「走住殊異」。」

<sup>87</sup> 前漢に之幽合韻8例(平声6例、上声1例、去声1例: 羅著130頁)、幽之合韻3例(平声2例、上声1例: 136頁)。

<sup>88</sup> 後漢に之幽合韻14例(平声6例、上声6例、去声2例: 羅著131頁)、幽之合韻12例(平声5例、上声6例、去声1例: 137頁)。

<sup>89</sup> 之幽合韻(去声)の杜篤「論都賦」平声と去声、闕名「王純碑」平声・上声・去声(羅著131頁)の2例。なお同頁の之幽合韻(上声)闕名「夏承碑」は平声と上声を含む。

<sup>90</sup> 前漢では(平声)王褒「九懷」の「蓄英」(羅著183頁)に含まれ上声または去声。後漢では(上声)馮衍「顯志賦」(187頁)により上声、(去声)杜篤「論都賦」(187頁)で平声または去声の「望」「鳴」と押韻し、上声または去声。

<sup>91</sup> 前漢の耕部韻字表(羅著191頁)に収録されていないため、前漢の耕陽合韻(去声)韋玄成「子孫詩」(羅著196頁)に依る。

<sup>92</sup> 注21を参照。

還歸郢也。(上声(靜韻)清韻,耕部?:h) ▲

一句目と三句目の押韻「f」は、上声または去声の陽韻陽部「上」と平声または去声の清韻耕部「盛」から構成され、陽耕合韻となる可能性がある。前漢の陽部と耕部の合韻 13 例<sup>93</sup>中、声調を跨いだ押韻は 0 例である。去声同士の押韻は成立するが、上声「上」と平声「盛」の押韻、上声「上」と去声「盛」の押韻、去声「上」と平声「盛」の押韻は考えにくい。韻目の面では陽韻陽部と清韻耕部の押韻が 0 例であり、陽韻陽部「上」と清韻耕部「盛」が押韻すると見なすことは困難だ<sup>94</sup>。従って、前漢において「上」と「盛」の押韻は成立しないと考えられる。

後漢の陽部と耕部の合韻 46 例<sup>95</sup>中、声調を跨いだ押韻には平声・上声・去声を含む押韻が 1 例ある<sup>96</sup>。去声同士の押韻が成立するほか、上声「上」と平声「盛」の押韻、上声「上」と去声「盛」の押韻、去声「上」と平声「盛」の押韻は成立する可能性が高い。韻目の面では 6 例に平声の清韻耕部と平声の陽韻陽部の押韻が見える<sup>97</sup>。以上より後漢では、おそらく去声の陽韻陽部「上」と去声の清韻耕部「盛」が押韻する。仮に、この 41 非定型注が前漢に作られたとすると、本来は押韻していなかった「上」と「盛」が後漢になり音の変化によって偶然押韻したことになる。このような現象は起こりうるが、起こる可能性は低いであろう。従って、少なくとも一句目から三句目は後漢に作られた可能性が高い。

ところで、一句目「從此以上」は第一段の第 04 句、第 10 句、第 20 句の非定型注の一句目「以言...」形式と異なる。「以言...」形式は 04「以言才德高明」のように「以言」より後の部分に本文をパラフレイズした実質的な内容が含まれるが、「從此以上」には実質的な内容が含まれない。仮に一句目を削除して二句目「皆陳山林傾危」から始めても内容的には遜色がなく、もしくは「以言...」形式を用い「以言山林傾危」としてもよい筈である。しかし、わざわざ一句目「從此以上」を独立させて配置したのは、内容とは別に一句目を入れる必要性があったからではなかろうか。すなわち非定型注においても韻文であることを重視し、何らかの押韻を構成するよう句を配置した結果、他の非定型注の一句目とは異なる「從此以上」になったと推測される。

四句目と五句目の押韻「g」は去声の魚韻魚部「居」と去声の虞韻魚部「聚」による魚部同士の押韻である。「麋鹿所居(g)、虎兕所聚(g)」と対偶で毎句押韻し、この部分には緊密な

<sup>93</sup> 注 43 を参照。

<sup>94</sup> なお、前漢で陽部と耕部を含む三韻以上の合韻には耕陽真(平声)(羅著 197 頁) 1 例があるが、声調を跨がず、陽韻陽部と清韻耕部の組み合わせも含まない。

<sup>95</sup> 注 45 を参照。

<sup>96</sup> 耕陽合韻(上声)の張衡「東京賦」「政(去声(勁韻)清韻耕部)、管(上声(靜韻)清韻耕部)、隍(平声唐韻陽部)、靜(上声(靜韻)清韻耕部)」(羅著 197 頁)。

<sup>97</sup> 陽耕合韻(平声)の崔琦「七蠲」、馬融「長笛賦」、闕名「成陽臺台碑」(羅著 189 頁)、耕陽合韻(平声)の傅毅「舞賦」、張昶「華山堂闕碑銘」、闕名「李翊夫人碑」(197 頁)の 6 例。

押韻が生じる。

七句目・九句目の押韻「h」は去声の清韻耕部「性」と上声の清韻耕部「郢」から構成され、ともに清韻耕部だが、声調は上声と去声で異なる。耕部には上声と去声からなる押韻が前漢に1例<sup>98</sup>が見えるため、「居」と「聚」は前漢では声調を跨いだ耕部同士の押韻として成立する。耕部で後漢に声調を跨いだ押韻は平声と上声2例<sup>99</sup>、平声と去声0例、上声と去声0例であり、去声「性」と上声「郢」を押韻と見なせるかは少々疑問である。しかし、「性」「郢」は清韻同士であり、清韻は韻部の移動がなく前漢・後漢ともに耕部に属する韻目であることから、後漢でも声調を跨ぐ押韻と見なしてよいであろう。

第41句の非定型注全体は去声の「上(f)、危(○)、盛(f)」、去声の「居(g)、聚(g)」、去声と上声の「徳(○)、性(h)、原(○)、郢(h)」からなり、二度換韻した複雑な形式を取る。一句目から三句目「上(f)、危(○)、盛(f)」は後漢に成立した可能性が高い。

さて、黄著によれば第41句の五句目「虎兕所聚」を景宋本では「虎兕所行」に作るという<sup>100</sup>。「虎兕所行」の場合は以下ようになる。

從此以上、 (上声(養韻)陽韻,陽部/去声(漾韻)陽韻,陽部?:k)  
皆陳山林傾危、 (平声支韻,歌部\*支部:○)  
草木茂盛、 (平声清韻,耕部/去声(勁韻)清韻,耕部:k)  
麋鹿所居、 (平声魚韻,魚部/去声(御韻)魚韻,魚部:○)  
虎兕所行、 (平声庚韻,陽部\*耕部<sup>101</sup>:k)  
不宜育道德、 (入声徳韻,職部:○)  
養情性、 (去声(勁韻)清韻,耕部:k)  
欲使屈原 (平声元韻,元部:○)  
還歸郢也。 (上声(靜韻)清韻,耕部?:k) ▲

去声の清韻耕部「盛」「性」を中心とし、上声または去声の陽韻陽部「上」、平声の庚韻で前漢は陽部に属し後漢は耕部に属する「行」、上声の清韻耕部「郢」が加わると考えられる。五句目を「虎兕所聚」に作る場合に挙げた通り、「上」と「盛」に関しては前漢で成立せず後漢で去

<sup>98</sup> 前漢の耕部(去声)無名氏「投閣諺」の「静(上声(靜韻)清韻)、命(去声(映韻)庚韻)」(羅著193頁)。なお、平声と上声による押韻は(平声)王褒「九懷」の「思忠」(192頁)、楊雄「解詡」、同「光祿勳箴」(193頁)の3例、平声と去声による押韻は0例。

<sup>99</sup> 後漢の耕部(平声)の班固「奕旨」(羅著194頁)、無名氏「桓帝初京都童謡」(196頁)の2例。

<sup>100</sup> 黄著2168頁「景宋本「所聚」作「所行」。…作「所行」、亦通。」

<sup>101</sup> 「行」は羅著では前漢の陽部韻字表(181頁)の平声唐韻に記載されるが、34頁に従って平声庚韻に記載されるべきであろう。後漢の耕部韻字表(191頁)では平声庚韻に収録される。「行」は『広韻』で平声唐韻・平声庚韻・去声(宕韻)唐韻・去声(映韻)庚韻に収録される。羅著では「行」は前漢・後漢ともに平声の字と押韻し去声の字とは押韻しないため、韻字表で平声にのみ収録するのであろう。江有誥『唐韻四聲正』(『江学音學十書』第七冊、廣文書局、1966年影印)13頁を参照。



声同士の押韻として成立し、「性」と「郢」に関しては前漢・後漢ともに去声と上声を跨ぎ押韻する。以下に残りの部分、「行」と耕部「盛」「性」「郢」、「行」と陽部「上」について考察する。羅著によれば「行」は、庚韻の中で「京」「明」「兄」等とともに前漢は陽部に属し後漢は耕部に移るグループに入るが、グループの中でも特殊で後漢では陽部と耕部の両方と押韻するという<sup>102</sup>。よって、「行」の押韻を考察する際には、まず「行」字の押韻例を確認し、押韻例が無い場合に「京」「明」「兄」等の同じグループの字の押韻例に対象を広げて確認するという方法を用いる。

まず、前漢に平声の庚韻陽部「行」と去声の清韻耕部「盛」「性」や上声の清韻耕部「郢」との間に押韻が成立するか確認する。陽部と耕部の合韻 13 例中「行」を含む押韻は 0 例であるが、清韻耕部と庚韻陽部（後漢は耕部）の押韻は 8 例ある<sup>103</sup>。韻目の面で庚韻陽部「行」と清韻耕部「盛」「性」「郢」は押韻しうる。しかし、合韻 13 例中に声調を跨ぐ押韻は 0 例のため、声調の面では平声「行」、去声「盛」「性」、上声「郢」を押韻とは見なせない。前漢においては、「行」と「盛」「性」「郢」が押韻する可能性は低い。

前漢で平声の庚韻陽部「行」は去声の陽韻陽部「上」と、陽部同士で声調を跨ぎ押韻することも想定される。前漢の陽部には「行」を含む押韻が 20 例あり、うち 19 例が陽韻の字と押韻する<sup>104</sup>。「行」を含み声調を跨ぐ押韻は 0 例であるが、「行」以外で声調を跨ぐ押韻は平声と上声 2 例、平声と去声 1 例、上声と去声 2 例がある<sup>105</sup>。従って、平声庚韻「行」は去声陽韻「上」と陽部同士の声調を跨いだ押韻を構成すると考えられる。

以上より、前漢では一句目「上」と五句目「行」が押韻し、三句目「盛」・七句目「性」・九句目「郢」が押韻するが、前者と後者の間では押韻が成立せず、「上 (i)、危 (○)、盛 (j)、居 (○)、行 (i)、徳 (○)、性 (j)、原 (○)、郢 (j)」と隔句押韻で、二種類の押韻が組み合わせられた複雑な押韻となる。

後漢になると平声庚韻「行」は耕部へ移る。「行」と去声の清韻耕部「盛」「性」や上声の清

<sup>102</sup> 羅著 34 頁「三、兩漢韻部分論」の陽部「西漢韻文本部字都在一起押韻，是和《詩經》一樣的。惟有庚韻一類字，像京明行兄等字偶爾和耕部字押韻。到了東漢，這一類字大半都轉入耕部，惟有‘行’字或跟本部叶，或跟耕部叶①，只可兩部兼收。」、同頁の注「①和‘行’字應用上的意義無關。」

<sup>103</sup> 耕陽合韻（平声）の韋孟「諷諫詩」、王褒「四子講徳論」、韋玄成「自劾詩」、班婕妤「自悼賦」、同「擣素賦」、（去声）の韋玄成「子孫詩」、班婕妤「擣素賦」、公孫乘「月賦」（羅著 196 頁）の平声 5 例、去声 3 例、計 8 例。

<sup>104</sup> 前漢の陽部「行」を含む押韻は、（平声）唐山夫人「安世房中歌」、嚴忌「哀時命」（二例目）、枚乘「七發」（二例目：なお「印」字は「印」字の誤記）、同「七發」（三例目）、孔臧「楊柳賦」（二例目）、王褒「洞簫賦」、同「九懷」の「通路」、同「九懷」の「尊嘉」、同「九懷」の「思忠」、同「僮約」、劉向「九歎」の「憂苦」、同「九歎」の「憂苦」（二例目）、同「杖銘」（羅著 183 頁）、楊雄「甘泉賦」、同「反離騷」（二例目）、同「解嘲」、同「執金吾箴」、同「元后誄」、闕名「郊祀歌」の「天門」、無名氏「鏡歌」の「雉子班」（184 頁）の平声 20 例である。うち楊雄「解嘲」以外の 19 例は陽韻を含む。

<sup>105</sup> 前漢の陽部で声調を跨ぐ押韻は、平声と上声が（平声）王褒「九懷」の「蕃英」、劉向「杖銘」（二例目）（羅著 183 頁）の 2 例、平声と去声が（平声）闕名「郊祀歌」の「天門」（184 頁）1 例、上声と去声が（上声）枚乘「七發」、（去声）王褒「四氏講徳論」（184 頁）2 例である。

韻耕部「郢」との間に、耕部同士の声調を跨いだ押韻が成立するのだろうか。韻目の面では庚韻と清韻の押韻が1例ある<sup>106</sup>ため、庚韻「行」と清韻「盛」「性」「郢」が押韻しうる。声調を跨ぐ押韻として、耕部に平声と上声は2例があり<sup>107</sup>、平声と去声は0例、上声と去声は0例である。平声と上声の2例中の1例である班固「奕旨」は「行（平声庚韻）、倅（上声（耿韻）耕韻）、争（平声耕韻）、平（平声庚韻）」のように「行」を含む。以上より、平声「行」と上声「郢」は押韻と見なせるが、平声「行」と去声「盛」「性」が押韻する可能性は低い。

続いて、後漢に平声の庚韻耕部「行」と去声の陽韻陽部「上」が押韻するかを検討する。陽部と耕部の合韻46例中に声調を跨いだ押韻は、平声・上声・去声の三種を含むものが1例あり<sup>108</sup>、平声「行」と去声「上」は声調を跨いだ押韻と見なせよう。また、庚韻耕部（前漢は陽部）と陽韻陽部の押韻は28例ある<sup>109</sup>ため、庚韻耕部「行」と陽韻陽部「上」は押韻と見なせる。後漢では平声の庚韻耕部「行」と去声の陽韻陽部「上」が押韻すると言えよう。

以上より、後漢では一句目の去声「上」と三句目の去声「盛」が陽耕合韻、去声「上」と五句目の平声「行」が声調を跨いだ陽耕合韻、去声「盛」と七句目の去声「性」が耕部同士の押韻、平声「行」と九句目の上声「郢」が声調を跨ぐ耕部同士の押韻、去声「性」と上声「郢」が声調を跨ぐ耕部同士の押韻になる。総合すれば、去声「上」・去声「盛」・平声「行」・去声「性」・上声「郢」の間に平声・上声・去声を跨いだ耕陽合韻が成立し、「上（k）、危（○）、盛（k）、居（○）、行（k）、德（○）、性（k）、原（○）、郢（k）」となる。

第41句の非定型注において五句目を「虎兕所行」に作る場合、前漢で「上（i）、危（○）、盛（j）、居（○）、行（i）、德（○）、性（j）、原（○）、郢（j）」という二種類の押韻が組み合わせられた複雑な押韻となり、後漢では「上（k）、危（○）、盛（k）、居（○）、行（k）、德（○）、性（k）、原（○）、郢（k）」という一種類の押韻となる。仮に、この注が前漢に作られたとすると、本来は分かれていた二種類の押韻が、後漢になり音の変化によって偶然にも一種類の押韻に合わさったことになる。このような現象は起こりうるが可能性は低く、41非定型注は後漢に成立したと考えられる。

第41句の非定型注については、五句目を「虎兕所聚」に作る場合に「上（f）、危（○）、盛（f）」「居（g）、聚（g）」「德（○）、性（h）、原（○）、郢（h）」という、対偶「麋鹿所居

<sup>106</sup> 耕部（平声）の班昭「東征賦」「征（平声清韻）、行（平声庚韻）」（羅著194頁）。

<sup>107</sup> 耕部（平声）の班固「奕旨」（羅著194頁）、無名氏「桓帝初京都童謡」（196頁）の平声2例。

<sup>108</sup> 耕陽合韻（上声）の張衡「東京賦」「政（去声（勁韻）清韻耕部）、嘗（上声（靜韻）清韻耕部）、隍（平声唐韻陽部）、靜（上声（靜韻）清韻耕部）」（羅著197頁）。

<sup>109</sup> 陽耕合韻（平声）の馮衍「顯志賦」二例、同「席後右銘」、杜篤「論都賦」、梁鴻「五噫歌」、班固「東都賦」（羅著188頁）、崔駰「七依」、同「車左銘」、黃香「九宮賦」、張衡「思玄賦」、同「東京賦」、同「南都賦」二例、馬融「圍棊賦」、同「廣成頌」、蔡邕「祖餞祝文」、闕名「鏡銘」二例、同「武梁祠堂畫像」、同「鄭固碑」、同「祝睦碑」、同「祝睦後碑」、同「郭君碑」、同「譙敏碑」、無名氏「古詩爲焦仲卿妻作」（189頁）、耕陽合韻（平声）の傅毅「舞賦」、張昶「華山堂闕碑銘」、闕名「李翊夫人碑」（197頁）の平声28例。

(g)、虎兇所聚(g)」を意識した複雑な押韻となり、少なくとも一句目から三句目「f○f」は後漢の成立と考えられる。五句目を「虎兇所行」に作る場合は、「上(k)、危(○)、盛(k)、居(○)、行(k)、徳(○)、性(k)、原(○)、郢(k)」の単純な隔句韻となり、全体が後漢に成立したと考えられる。「聚」の場合も「行」の場合もそれぞれ押韻が成立するため、二種類の伝承が併存したことが想定される。

## 第二段まとめ

本文同士の押韻は、21～29が「峽兮軋(A)、山曲崑(A)、心淹留兮(○)恫慌忽(A)。罔兮沕(A)、僚兮栗(A)、虎豹穴(A)、叢薄深林兮(○)人上慄(A)。」と毎句押韻する。30～37は「嶽岑礚礚兮(B)礚礚礚礚(B)、樹輪相糾兮(○)林木茂飢(B)。青莎雜樹兮(○)蘋草蠶靡(B)、白鹿麀麀兮(○)或騰或倚(B)。」と毎句押韻であり、冒頭一句のみ句中の「兮」字の直前でも押韻する。38～41は「狀兒崑崑兮峨峨(C)、淒淒兮澁澁(C)。獼猴兮熊羆(C)、慕類兮以悲(C)。」と毎句押韻する。

注に関しては、以下の七点を指摘できる。

第一に、原則として本文一句に対し四字句を基調とした一句の定型注が付され、小南一郎氏のいう「Ib形式」である。ただし、23～24、28～29では本文一句に対し一句の注が二箇所に分けて付されている。

第二に、定型注は31以外が押韻し、押韻する部分は毎句押韻である。27、29、35、37、41で五度換韻する。韻の長さは二句二韻から七句七韻である。

第三に、21～27定型注は後漢に成立したと考えられる。36～37の定型注に関しては、37を「走住殊異」に作る場合は後漢の成立と考えられる。

第四に、41非定型注は、定型注の換韻箇所配置されている。

第五に、41に九句の非定型注が付され、五句目が「虎兇所聚」の場合は「f○f」「g g」「○h○h」と二度換韻し、隔句押韻を基調としつつ、一部に毎句押韻を含む。「f○f」部分は後漢に成立したと考えられる。五句目が「虎兇所行」の場合は「k○k○k○k○k」と一韻の隔句押韻であって、全体が後漢に成立したと考えられる。

第六に、41非定型注は八句目～九句目「欲使屈原 還歸郢也」と屈原に言及する。

第七に、36～37定型注は37を「走住殊異」に作る場合に平声と去声を跨ぐ押韻となる。38～41定型注には平声と去声を跨ぐ押韻が、41非定型注には平声・上声・去声を跨ぐ押韻が見える。

本文と注の関係については、以下二点を指摘できる。

第一に、本文の換韻と注の換韻には一致する箇所と一致しない箇所とがある。29、37、41は一致する。しかしながら、本文21～29に対し注は27で換韻し、本文は21～27「AA○AA

AA」と28～29「OA」に分断される。また本文30～37に対し注は31、35で換韻し、本文は30～31「BB」、32～35「OB○B」、36～37「OB」に分断される。

第二に、本文と注を続けて朗読した場合、例として21～22は「(本文) 块兮軋、(注) 霧氣味也。(本文) 山曲峴、(注) 盤詰屈也。」となり、本文の分量と注の分量に大きな差はない。注の押韻だけでなく本文の押韻も印象に残るであろう。

### 第三段

- 42 攀援桂枝兮 (平声支韻, 支部:○) 注配託香木、 (入声屋韻, 屋部:○) <sup>110</sup>  
誓同志也。(去声(志韻)之韻, 之部: a)
- 43 聊淹留、(平声尤韻, 幽部: A<sup>111</sup>) 注踟躕低徊、 (平声灰韻, 脂部?<sup>112</sup>:○?)  
待明時也。(平声之韻, 之部: a) ▲
- 44 虎豹鬪兮 (去声侯韻, 魚部:○) 注殘賊之獸、 (去声(宥韻)尤韻, 幽部<sup>113</sup>:○)  
忿爭怒也。(上声(姥韻)模韻, 魚部<sup>114</sup>: b)
- 45 熊羆咆、(平声肴韻, 幽部: A) 注貪殺之獸、 (去声(宥韻)尤韻, 幽部:○)  
跳梁吼也。(上声(厚韻)侯韻, 魚部?<sup>115</sup>: b)
- 46 禽獸駭兮 (上声駭韻, 之部:○) 注雉兔之羣、 (平声文韻, 真部:○)  
驚奔走也。(上声(厚韻)侯韻, 魚部<sup>116</sup>: b)
- 47 亡其曹。(平声豪韻, 幽部: A) 注違離黨輩、 (去声(隊韻)灰韻, 脂部?<sup>117</sup>:○)  
失羣偶也。(上声(厚韻)侯韻, 魚部<sup>118</sup>: b)
- 48 王孫兮歸來、 注旋反舊邑、 (入声緝韻, 緝部:○)  
(平声哈韻, 之部<sup>119</sup>:○<sup>120</sup>) 入故宇也。(上声(慶韻)虞韻, 魚部: b)

<sup>110</sup> 第42句本文の押韻字「枝」、注の押韻字「木」は、第11句本文の押韻字「枝」、注の押韻字「木」と組み合わせが同じである。

<sup>111</sup> 幽部、羅著133頁。

<sup>112</sup> 唐著227頁「徊」は微部。同書における上古音の微部は羅著の漢代音では脂部に入る(羅著11～14頁)。

<sup>113</sup> 「獸」は『広韻』で去声(宥韻)尤韻にのみ収録されるが、羅著の幽部韻字表(133頁)で上声(宥韻)尤韻にも収録される。前漢の幽宵合韻(上声)の司馬相如「子虛賦」、同「封禪文」、幽之合韻(上声)の王褒「四子講德論」(136頁)に依ったのであろう。江有誥『唐韻四聲正』65頁を参照。

<sup>114</sup> 上声のほか「去声(暮韻)模韻, 魚部?」もある。

<sup>115</sup> 上声のほか「去声(侯韻)侯韻, 魚部?」もある。唐著176頁「响」は侯部、郭著275頁「响(吼)」は侯部。

<sup>116</sup> 上声のほか「去声(侯韻)侯韻, 魚部?」もある。唐著217頁「走」は侯部、郭著280頁「走」は侯部。両書における上古音の侯部は羅著の漢代音では魚部に入る(羅著11～14頁)。

<sup>117</sup> 唐著6頁「輩」は微部、郭著212頁「輩」は微部。両書における上古音の微部は羅著の漢代音では脂部に入る(羅著11～14頁)。

<sup>118</sup> 上声のほか「去声(侯韻)侯韻, 魚部?」もある。唐著110頁「偶」は侯部、郭著273頁「偶」は侯部。

<sup>119</sup> 「來」は羅著では去声にも収録される。注60を参照。

<sup>120</sup> なお、王泗原『楚辭校釋』(人民教育出版社、1990年)324頁は「來、故楚地的方音讀如樓、來留爲韻。」とする。羅著においては判定が厳格で「來」を押韻に入れていない。羅著の枠組みでも以下の押韻例から哈韻部「來」と尤韻幽部「留」を押韻と考えることは可能だ。之部と幽部の合韻は前漢11例、後漢26例、詳細は注87・88を参照。

49 山中兮不可以久留。

注誠多患害、（去声泰韻,祭部:○）

（平声尤韻,幽部:A）▲ 難隱處也。（上声(語韻)魚韻,魚部<sup>121</sup>:b）▲

### 第三段まとめ

本文同士の押韻は、42～49「攀援桂枝（○）兮聊淹留（A）、虎豹鬪兮（○）熊羆咆（A）、禽獸駭兮（○）亡其曹（A）。王孫兮歸來（○）、山中兮不可以久留（A）。」であり、48「王孫兮歸來」以外は毎句押韻する。

注については、以下三点を指摘できる。

第一に、42～47では本文一句に対し、四字句で二句一聯の定型注が二箇所に分けて付されており、第一段の注と同様に「Ia形式」に類似する。末尾48～49では本文一句に対し、四字句で二句一聯の注が一箇所に付されており、純粋な「Ia形式」である。

第二に、定型注全体は押韻し、隔句押韻である。43で一度換韻する。韻の長さは四句二韻と十二句六韻である。

第三に、42～43定型注は平声と去声を跨ぎ押韻する。

本文と注の関係については、以下二点を指摘できる。

第一に、本文の換韻と注の換韻は末尾49では一致する。一致しない箇所もあり、本文42～49に対し注は43で換韻し、本文は42～43「○A」と44～49「○A○A○A○A○A」に分断される。

第二に、本文と注を続けて朗読した場合、例として03～04は「(本文) 攀援桂枝兮 (注) 配託香木、誓同志也。(本文) 聊淹留 (注) 踟躕低徊、待明時也。」となり、本文の分量に対して注の分量が多くなる。第一段における本文の分量と注の分量の比率に類似するが、第一段では非定型注が加わるのに対し、第三段に非定型注は付されておらず、第一段のように注の分量が圧倒的に多くなる訳ではない。しかし、本文と注を続けて朗読すると本文の分断が強まり、注の押韻を中心に鑑賞することになる点は第一段と同様である。

## 3 おわりに

「招隱士」本文と注について主に黄著・羅著を用いて検討した。

本文同士の押韻は、基本的に句末字の毎句押韻であり、複雑な押韻は見られない。48のみ押

---

うち哈韻之部と尤韻幽部の押韻は、前漢に之幽合韻（平声）の班婕妤「自悼賦」（130頁）1例、後漢に之幽合韻（平声）の班彪「北征賦」、王逸「九思」の「傷時」（131頁）、幽之合韻（平声）の班彪「北征賦」（137頁）の3例。

<sup>121</sup> 上声のほか、「去声(御韻)魚韻,魚部」もある。

韻しない。

注は定型句と非定型句に大別され、注については以下八点を指摘できる。

第一に、定型注の形式を述べる。第一段（01～20）の大半と第三段（42～49）の大半では、本文一句に対し四字句を基調とした二句一聯の注が二箇所に付され、小南一郎氏のいう I a 形式に類似する。第三段の一部では本文一句に対し二句一聯の注が一箇所に付され、純粋な I a 形式となる。第二段（21～41）の大半では、本文一句に対し四字句を基調とした一句の定型注が付され、小南一郎氏のいう I b 形式である。第二段の一部では本文一句に対し一句の注が二箇所に付され、I b 形式に類似する。以上のように、「招隠士」は第一段に I a 形式の注が、第二段に I b 形式の注が付され、第三段に再び I a 形式の注が付される。

付言すれば、本文の形式は第一段の末尾がおおむね「×××兮××」であるのに対し、第二段の冒頭は「×兮×、×兮×、×××兮×××」となり句形が変化する。第二段の末尾は「×××兮××」、第三段の冒頭は「××××兮×××」であり句形は若干変化する。注の形式の使い分けは本文の句形の変化に応じていると言えよう。

第二に、03～49 の定型注は 31 を除く四十六箇所で押韻する。二句一聯からなる I a 形式では「○b○b」と隔句押韻し、04、10、13、16、18、20 と 43 で換韻し、韻の長さは四句二韻から十二句六韻である。一句からなる I b 形式では毎句押韻し、27、29、35、37、41 で換韻し、韻の長さは二句二韻から七句七韻である。

第三に、定型注の四十六韻のうち、05～10 六韻と 21～27 七韻の計十三韻は後漢音の可能性が高い。また 36～37 の二韻は、37「走住殊異」の場合は後漢音の可能性が高い。少なくとも 05～10 と 21～27 の十三韻、約 28%が後漢音であり、36～37 を加えれば計十五韻、約 33%が後漢音となる。

第四に、非定型注の形式を述べる。01～02 は二句一聯の定型注が二箇所に付されている点は定型注と同様であるが、01 下句が八字句である点と全体の押韻が毎句押韻「a a a a」である点で非定型である。04、10、20 では定型注の直後に非定型注が入る。非定型注は、04 が三句で毎句押韻「c c c」形式、10 は六句で隔句押韻と毎句押韻を組み合わせた「○e e○e e」、20 は四句で隔句押韻と毎句押韻を組み合わせた「j j○j」である。41 は九句であり、押韻字によって隔句押韻と毎句押韻の組み合わせ「f○f」「g g」「○h○h」または隔句押韻「k○k○k○k○k」となる。非定型注は全て押韻し、01～02 の四韻、04 の三韻、10 の四韻、20 の三韻、41「f○f」「g g」「○h○h」の六韻または「k○k○k○k○k」の五韻を合計すると、二十韻または十九韻である。

補足として、小南氏の分類による「Ⅱ形式」の注<sup>122</sup>について述べる。小南氏によればⅡ形式の注は基本的に韻を踏まず、厳格には四字句の形態も取らないが、部分的にⅠ形式の注を取り込んで押韻する場合もある。Ⅱ形式の注の中では、「第一の要素」が「本文の字句（中略）に対し直接に注釈を施した部分」、「第二の要素」は「言己」の二字から始まることが多く、「本文の表現を忠実にパラフレイズする部分」、「第三の要素」はしばしば「言（言うところは）」の字を冠して始められ、「本文の背後にある、作者が比喩などに託した意味を説明する部分」であるという。

「招隠士」では一例として03～04を見てみよう。まず01本文「桂樹叢生兮」に対し、注「桂樹芬香、以興屈原之忠良也」が「桂樹」は「屈原」を示すと解説している。03～04本文「偃蹇連蜷兮 枝相繚」に対し、定型注「容貌美好、惠茂盛也。信義枝結、條理成也」は本文をパラフレイズしながら、桂樹の「枝」が生い茂る様は屈原の「惠（徳）」や「信義」を示すと述べ、内容面では第二の要素にやや類似するが、「言己」を冠することはない。04非定型注「以言才徳高明、宜輔賢君、爲貞幹也」は屈原が君主を補佐すべき人物であるという、本文の背後にある意味を説明する。形式上でも04、10、20非定型注は「以言…」から始まっており、「招隠士」非定型注は第三の要素に類似すると言えよう。

なお、「招隠士」非定型注は全て押韻しており、Ⅱ形式の注が基本的に韻を踏まないとの記述と相違するが、Ⅱ形式の注は部分的にⅠ形式の注を取り込んで押韻する場合があるとの記述もあることから、「招隠士」非定型注がⅡ形式の注に類似すると言っても大きな矛盾は生じない。

「招隠士」非定型注は、Ⅱ形式が部分的にⅠ形式の注を取り込んだというよりも、Ⅰ形式の韻文体とⅡ形式の本文の意味を説明する役割を兼ねた注釈であるようだ。

第五に、04、10、20、41の非定型注は、定型注の換韻箇所位置しており、非定型注によって定型注の押韻が阻害されることはない。

第六に、非定型注の成立年代を述べる。01～02の01下句を「以興屈原之忠貞也」に作る場合は後漢に成立したと考えられる。04は後漢の成立と考えられる。41は五句目を「虎兕所聚」に作る場合に一句目～三句目の二韻「f○f」が後漢に成立したと推測され、五句目を「虎兕所行」に作る場合は全体の九句五韻「k○k○k○k○k」が後漢に成立したと考えられる。後漢音は最少で04の三韻と41「虎兕所聚」の場合の二韻、計五韻であり、全二十韻の25%を占める。最多で01～02の四韻、04の三韻、41「虎兕所行」の場合の五韻、計十二韻であり、全十九韻の約63%を占める。

第七に、01～02、10、41の非定型注は「屈原」に言及する。

<sup>122</sup> 注1 小南著 310～313頁、319～320頁。

第八に、04 非定型注、38～41 定型注、42～43 定型注の三箇所は、平声と去声を跨いで押韻する。41 非定型注は平声・上声・去声を跨いで押韻する。また、36～37 定型注は37「走住殊異」の場合に平声と去声を跨いで押韻する。

本文と注の関係について、以下二点を指摘した。

第一に、本文の換韻と注の換韻には一致する箇所と一致しない箇所とがある。04、16、20 と29、37、41 および末尾49では一致する。一方で、注02、10、18の換韻により、本文は「○A」と「○A」のように両断される。注13の換韻によって本文は「○」と「D○D」に、注27の換韻により本文は「AA○AAAA」と「○A」に、注31・35の換韻で本文は「BB」「○BOB」「○B」に、注43の換韻により本文は「○A」と「○A○A○A○A○A○A」に分断される。

第二に、本文と注を続けて朗読した場合について述べる。第一段・第三段では定型注が二句一聯であり、本文の分量に対し注の分量が多くなる。第二段では定型注が一句であり、本文の分量と注の分量に大きな差はない。第一段と第二段の非定型注が付された箇所では、注の分量が増加する。本文と注を続けて朗読すると、注の分量が多い箇所では本文の分断が強まって印象が薄れ、注の押韻を中心に鑑賞することになるだろう。

以上の「招隠士」考察結果を前々稿の「卜居」考察結果、前稿の「漁父」考察結果と比較してみよう。「卜居」・「漁父」本文は問答形式であり、複雑な押韻形式が見えるが、「招隠士」本文は問答形式ではなく、単純な毎句押韻を基調とする。三作品の注には平声と去声を跨ぐ押韻が見える点が共通する。本文と注を組み合わせ朗読した場合、三作品ともに本文の印象が薄らぐ傾向にあるが、「卜居」・「漁父」では本文が複雑な押韻形式を持つ部分で本文の印象が薄れ、「招隠士」では本文の分量に対し注の分量が多い部分で本文の印象が薄れるという違いがある。本文の換韻と注の換韻に、一致する箇所と一致しない箇所の両方がある点は三作品とも同様である。

小南氏によれば、「遠遊」ではIa形式の注が本文の一般的な叙事の部分に付され、Ib形式の注は本文での神仙の聖なる教えに対して付されるという<sup>123</sup>。「卜居」ではIa形式とIb形式の境目は本文の叙事と登場人物の言葉との境目と一致せず、「遠遊」に見えるような注の使い分けは認められない。「漁父」にはIb形式の注のみが付され、注を使い分けることをしない。「招隠士」は本文の形式が若干変化するのに応じて、Ia形式とIb形式の注を使い分ける。「遠遊」「卜居」「漁父」「招隠士」の四篇は、Ib形式の注が付されるという点が共通であるが、Ia形式と併用するのかIb形式のみを用いるのかという点を含め、注の使い分けに関しては作品ご

---

<sup>123</sup> 注1 小南著 307～310頁。



とに差異が大きく、統一した使い分けの方法は見られないようである。

最後に、「招隠士」注の成立、特に定型注と非定型注の関係について考察を加えたい。定型注同士がほぼ同時期に成立し、非定型注同士がほぼ同時期に成立したとすれば、二種類の注の成立には以下の通り四つの仮説が考えられる。一つ目は、先に定型注が作成され、後に非定型注が付加されたという説である。二つ目は、定型注と非定型注がほぼ同時期に同一の個人または同一の製作者集団によって作成されたという説である。三つ目は、二種類の注がほぼ同時期に別々に作成され、後に合一されたという説である。四つ目は、先に非定型注が作成され、後に定型注が付加されたという説である。

定型注と非定型注の両方が付された部分は 04、10、20、41 の四箇所あるが、注についての第五で挙げたように、四箇所全てにおいて非定型注は定型注の換韻箇所に付されており、定型注の押韻が非定型注によって阻害されることはない。三つ目の仮説のように、二種類の注が後に合一されたとすれば、定型注の換韻箇所と非定型注が付された箇所が全て一致する可能性は低いから、三つ目の仮説は成立し難い。

内容面を見ると前掲 03～04 では、本文「偃蹇連蜷兮 枝相繚」に対し直接に 04 非定型注「以言才德高明、宜輔賢君、爲貞幹也」が付されるには内容の飛躍が大きいため、まず定型注が「容貌美好、惠茂盛也。信義枝結、條理成也」と本文を解釈するのを受け、04 非定型注が本文の背後にある深い意味を説明したと考えられる。もう一つの例として、13～20 では本文「王孫遊兮 不歸、春草生兮 萋萋。歲暮兮 不自聊、蟋蟀鳴兮 啾啾」に対し、20 非定型注「以言物盛則衰、樂極則哀、不宜久隱、失盛時也」が付されるが、本文との間にはやはり飛躍がある。非定型注の「物盛則衰」は 17 定型注「年齒已老、壽命衰也」を踏まえた表現であり、「樂極則哀」は 18 定型注「中心煩亂、常含哀也」や 19～20 定型注「蝓蟬得夏、喜呼號也。秋節將至、悲噉噉也」を、「不宜久隱」は 13 定型注「隱士避世、在山隅也」を受けた表現であろう。定型注と非定型注の両方が付された 04、10、20、41 の四箇所のうち、少なくとも 04、20 の二箇所では非定型注は定型注を踏まえている。すると、四つ目の仮説、先に非定型注が作成され、後に定型注が付加されたという説は成り立たない。

注についての第六でまとめたように、定型注は約 28%から約 33%が、非定型注は 25%から約 63%が後漢音と考えられる。二種類の注ともに、前漢音は確認されなかったため前漢に遡るとは断言できないものの、後漢音以外は前漢・後漢ともに成立する押韻であるため一部が前漢に作られた可能性を完全に否定することはできない。少なくとも現行の形が確定したのは後漢であると考えてよいだろう。さて、定型注の最少約 28%と非定型注の最少 25%は近接しているものの、定型注の最多約 33%と非定型注の最多約 63%は倍近く離れている。この現象をどのように解釈すべきか。

まず考えられるのは時間的な差異である。定型注は比較的早い段階に成立し、非定型注は遅れて成立したと考えることができる。より正確に言えば、定型注は何らかの伝承を受け継いだものであって成立に時間的な幅があり、前漢に遡りうる部分も少なからず含んでいるため後漢音の比率は低い。対して非定型注は、後漢で新たに書き下ろされたため後漢音の比率が高くなったという推測である。この推測は一つ目の仮説に沿うものだ。

また、羅著「三、兩漢韻部分論」によれば、文人の押韻には古音（讀書音）を用いることがあるが、民間の押韻は今音（口語音）を用いるといい、同じ文人の作品でも古音を用いる場合と今音を用いる場合があるともいう<sup>124</sup>。羅著の指摘に従えば、一つには、二種類の注はほぼ同時期に成立したものの、定型注は古音を比較的重視した文人の作であるため後漢音の比率が低く、非定型注は民間の作であるため後漢音の比率が高くなったと推測できる。しかし、この推測は三つ目の仮説、二種類の注がほぼ同時期に別々に作成され、後に合一されたという説に該当し、上述の通り、定型注の換韻箇所と非定型注が付された箇所が全て一致する点から三つ目の仮説は成立し難いため、文人の作と民間の作という推測も成り立たないであろう。

羅著に基づくもう一つの推測として、二種類の注は同一の文人の作であって、定型注には古音を多用し、非定型注には今音を多用したと考えることもできる。押韻の使い分けは、定型注が四字句を基調とし、非定型注は四字句を基調としつつも長短句が入り混じるという句形の差異と関係するのかもしれない。注についての第七に挙げた通り、非定型注は01~02、10、41の三箇所「屈原」に言及する。対して定型注は「屈原」に言及することがなく、同一の文人の作と考えると内容面でも使い分けがなされているようだ。しかし、定型注において本文のパラフレイズに古音を多用し、非定型注において04「以言才德高明、宜輔賢君、爲貞幹也」、41「不宜育道德、養情性、欲使屈原、還歸郢也」のように高尚な内容を語りながら今音を多用するのは少々不自然である。二種類の注が同一の文人の作であり、古音と今音の比率を使い分けるならば、より高尚な内容の非定型注に古音を多用して格調高く詠み上げてよいのではないか。押韻の使い分けと内容面の使い分けに聊か符合しない点があるため、同一の文人の作という推測には疑問が生じる。さらに、二種類の注が古音と今音を使い分けていない同一の作者によるものであるとすれば、二種類の注における後漢音の比率は似通った数値となる可能性が高く、古音と今音を使い分けていない同一の作者による作品という推測も成立し難いであろう。同一の文人の作品や同一の作者の作品という推測は、上記二つ目の仮説に該当するものであり、二

<sup>124</sup> 羅著 16~44 頁「三、兩漢韻部分論」。魚部麻韻の一部の字が後漢に歌部に移ることに關して「不過在開始演變的時候，文人用韻常有不一致的現象，有的規模前代，有的根據當時的讀音，所以參差不齊。」(22 頁)、「車」字に二音があることに關して「音居代表古音，音尺遮切代表今音。也就是讀書音和口語音的不同。文人押韻常常不拘一格，所以有分歧的現象，有時同一個人的作品也不完全一致。‘車’字就是一個很好的例子。從東漢直到齊梁以下都是如此。但是民間的作品就不然了，從東漢直到齊梁都是按照口語音尺遮反來押韻的」(24 頁)。

つ目の仮説も成立が難しくなる。

以上より、一つ目の仮説、先に定型注が作成され、後に非定型注が付加されたという説が有力であろう。一つ目の仮説に基づいて「招隠士」注の成立を推測すれば以下のようなになる。前漢から後漢にかけて定型注が成立したが、「屈原」への直接の言及はなく、本文の解釈において「屈原」との関連付けは希薄であった。後漢において、定型注の換韻箇所非定型注が付加され、複数回「屈原」に言及することで本文を「屈原」と強固に関連付けて解釈するようになった、という推測である。

ところで、01～02注は定型注の特徴と非定型注の特徴を併せ持ち、本稿では非定型注に分類したものである。興味深いことに、01下句は「以興屈原之忠良也」と「以興屈原之忠貞也」の二通りの伝承を持ち、「良」は前漢・後漢ともに押韻し、「貞」は後漢においてのみ押韻する。以上の特徴から、次のような変遷を推測することができよう。まず早い段階で「良」を用いる注釈が作成され、01下句は四字句を基調とした「興忠良也」のような形であり、全体は「桂樹芬香、興忠良也。遠去朝廷 而隱藏也」といった形式であった。後漢になると非定型注の作成者が「屈原」の語を嵌め込んで「桂樹芬香、以興屈原之忠良也。遠去朝廷 而隱藏也」に改作した。改作の折であろうか、後漢音によって「貞」を用いた「桂樹芬香、以興屈原之忠貞也。遠去朝廷 而隱藏也」が生じた。既存の定型注を改作するという方法が取られたため、01～02注は定型注の特徴と非定型注の特徴を併せ持つようになった。定型注を改作した理由は、01～02が全編の冒頭に位置し、最初の二句一聯に「屈原」を嵌め込むことで本文の解釈全体を「屈原」と結び付ける意図があったからであろう。換韻箇所に新たに加筆する方法では、01～02定型注四句二聯の後で「屈原」に言及することになり、「屈原」の印象が薄らぎかねない。なお、押韻については、「良」を含む毎句押韻が前漢でも成立するため、毎句押韻が早い段階で既に備わっていた可能性が高く、その場合は定型注の冒頭部分のみ押韻を緊密にしたと解釈される。しかし、早い段階では他の定型注と同様に隔句押韻で、後漢に改作された際に読者あるいは聴者の注意を引くために毎句押韻に改められた可能性も否定できない。以上が01～02注の変遷に関する推測である。

さて、『章句』のIb形式を含む注釈の特徴を明らかにするためには、Ib形式の注を伴う「遠遊」・「卜居」・「漁父」・「招隠士」四篇のうち、残る「遠遊」も詳細に検討すべきであるが、「遠遊」については今後の課題とする。

本稿は、2023 宜昌秭帰・屈原及楚辞学国際学術研究会暨中国屈原学会第十九届年会（湖北省宜昌市、2023年4月）における録画による研究発表を基に改訂加筆したものである。

本稿は、令和元年度科学研究費補助金 基盤(C)「伝統的『楚辞』解釈の再検討」(17K02635)による成果の一部である。